

[ 研究ノート ]

## 亡命ロシア文学史研究者 グレープ・ストルーヴェ研究<sup>(1)</sup>

中野幸男

はじめに

本論は、亡命ロシア文学史研究者グレープ・ペトローヴィチ・ストルーヴェ (Gleb Petrovich Struve, 1898.4.19(旧暦)－1985.6.4)の人生と仕事についての伝記的記述を目的としている。これまで「亡命文学」を特殊化してきた基準は、現在の観点からはしばしば無効化していることが認識されている。サミズダートとタミズダートに支えられた「亡命文学」の時代は、すでに歴史のひとつコマとなる一方、その膨大な遺産をいかにロシア文学に組み込み(刊行中のソルジェニーツィン全集、亡命者の回想録)、あるいは「亡命文学」から切り離し(ナボコフ、ブロッキー)、そしていかに記録することができるか、が今後の課題となっている。

ストルーヴェが1956年の著作『亡命ロシア文学』で語っているように、「亡命ロシア文学」に関する研究は当時ほぼ存在していなかった。ストルーヴェ自身、数少ない先行研究として1929年にベオグラードで刊行されたアレクサンドル・アンフィテアトロフ『亡命文学：ミラノ文学協会で行われた公開講義』というわずか57ページの冊子を挙げているが、執筆時には使用していないと語っている<sup>(2)</sup>。

本論はアーカイヴ資料やグレープの死後刊行され続ける亡命者間の往復書簡を元にしなが、彼の語る亡命ロシア文学の「在庫目録」に含むことのできなかった時代を含む「亡命ロシア文学」の体現者としてのグレープの基礎的な伝記的研究を目標としている。すでにグレープ・ストルーヴェに関しては、彼の生前に作成されたロバート・P. ヒューズによる1979年までの詳細なビブリオグラフィーが出版されている<sup>(3)</sup>。1975年のサマーリンの論文を始め1985年以降は追悼文や序文などいくつかの短い伝記は

(1) 本稿は平成22年度日本学術振興会・科学研究費補助金(課題番号21・10358)に基づく研究成果の一部である。

(2) Gleb Struve, *Russkaia literatura v izgnanii* (Paris: YMCA-Press, 1984), p.8; A. V. Amfiteatrov, *Literatura v izgnanii* (Belgrad: Ottisk gazety "Novoe Vremia," 1929).

(3) Robert P. Hughes, "Gleb Struve: A Bibliography," *California Slavic Studies* 11 (1980), pp. 269-317.

現れたものの、ストルーヴェ本人を亡命文学者として研究対象とした研究はほとんど書かれていない<sup>(4)</sup>。グレープ・ストルーヴェは文学史の書き手であると同時に、ナボコフ、ツヴェターエヴァ、ホダセーヴィチなどの同時代人としての「亡命文学」の構成要素でもある。特定の作家の影に隠れながら、文学史家として作家に注釈をつけ、作家を文学史の中に位置づけてきた文学史家グレープ・ストルーヴェ自身の伝記的事実について、本論では同時代人との比較に配慮しながら、時代を追って概観する。

第1章ではとりわけ影響力の大きかった父ピョートルを中心に家族について、また同時代人のナボコフやミルスキーなどと並べながらヴィボルク商業学校などの学生生活について、そして父ピョートルの活動を追いながら亡命に至る経緯について説明する。またオックスフォード大学卒業後からスラヴ東欧研究所以前のジャーナリスト時代についても概観する。

第2章ではスラヴ東欧研究所から渡米までの時期を扱う。ソ連に渡った前任者ミルスキーと比較しつつ、ソヴィエト・ロシア文学史執筆とその影響に関して分析する。また戦時下のストルーヴェの生活について、同僚であった比較文学者ルネ・ウェレックの渡米について触れながら、ストルーヴェの渡米にいたる経緯を説明する。

第3章ではカリフォルニア大学バークリー校就任以後の時期を扱う。戦後アメリカのスラヴ研究の発達を概観しながら、ストルーヴェらによって行われたソ連国内で弾圧された詩人・作家の作品集の出版の経緯とその影響を分析する。とりわけチェホフ出版社とそこから出されたストルーヴェの主著『亡命ロシア文学』について、出版とその反響について触れながら、彼の亡命ロシア文学観について分析する。

終章ではストルーヴェの伝記的研究を踏まえた今後の研究上の課題および展望について概観する。

## 1. 学生・ジャーナリスト・ピョートルの子 1898-1931

よく知られている父ピョートルのみならず、父と対照的な家庭で育ったグレープの母ニーナや残り4人の兄弟、特に次男のアレクセイはグレープの人生に大きな影響を与えている。以下グレープの家族について概観する。グレープはストルーヴェという家名を背負って生まれている。父ピョートルはグレープの生涯に渡って影響を与え続け、またグレープ自身その影響と恩恵を受けながら成長した。1932年のロシア東欧研

(4) K. Yu. Lappo-Danilevskii, "Gleb Struve - Istorik literatury," in Gleb Struve, *Russkaia literatura v izgnanii* (Moscow: Russkii put', 1996), pp. 7-17; V. Samarin, "G. P. Struve," *Transactions* 9 (1975), pp.309-313; G. S. Smith, "Gleb Petrovich Struve (1898-1985): A Memoir," *Slavonic and East European Review* 64, no. 4 (1986), pp. 569-570; O. Raevskaia-Hughes, "Pamiat' G. P. Struve," *Vestnik RKhD* (1986), pp.198-201.

究所の就職に至るまでグレープの人生にはピョートルの影がちらついている。スラヴ東欧研究所以前の時代は、ジャーナリストとしての雑誌への寄稿・編集経験、および通訳経験による語学力の上達も含め、その後のグレープの活動に豊かな実体験として残る時期であった。

グレープ・ストルーヴェは5人兄弟の長男としてサンクトペテルブルクで生まれている。父は政治家、経済学者、思想家のピョートル・ベルンガルドヴィチ・ストルーヴェ（1870.1.26（旧暦）－1944.2.26）。母は著名な教育者アレクサンドル・ヤコヴレヴィチ・ゲルト（1841－1888）の娘、アントニーナ（ニーナ）・アレクサンドロブナ・ゲルト（1868－1942）。ギリシア語を晩年まで読みこなし父と進歩的教育者の家庭で教育を受けた母との対照は、後に古典教育が必須である保守的なギムナジウムでなく進歩的で古典語が選択科目であったヴィボルク商業学校へのグレープの進学に対する父の反対にも表れていた<sup>(5)</sup>。

まずグレープの弟たちの人生を先回りして概述する。

二男アレクセイ（1899－1976）はグルノーブル大学およびソルボンヌにて学び、後にロシアの古書・稀覯書を専門とする古書業をパリで営み、書店「古本にて Au Vieux Livre」を経営した。マンデリシュターム研究で著名なニキータ・ストルーヴェ（1931－）はアレクセイの長男（グレープの甥）であり、アレクセイの長女タチヤーナ（1921－）はザミャーチン未亡人リュドミラ・ザミャーチナとも交流した<sup>(6)</sup>。ピョートルの三男コンスタンチン（1900－49）はハイデルベルク大学およびプラハ大学神学部で学び、パリのセルギエフ教会付属神学大学を卒業後、ユーゴスラヴィアのヴェーラヤ教会で修道士となる。修道士名はサツヴァ神父。第二次大戦中はスロヴァキアの対独パルチザンに参加、戦後はモスクワ総主教管区にて大修道院長となった。四男レフ（1902－29）は1920年秋にフィンランドに亡命、チェコスロヴァキアのモラフスカー・トゥシェボヴァーのロシア語ギムナジウムを卒業後、ベルリンにて学ぶが1923年に結核に罹病、ドイツ、イタリア、フランス、スイスのサナトリウムを転々とする<sup>(7)</sup>。『ロシア』および『ロシアとスラヴ民族』誌においてL. ペトロフの変名にて寄稿した。1929年にスイスのダヴォスにて死去。五男アルカージイ（1905－51）は1920年秋に三男コ

(5) Gleb Struve, *K istorii russkoi poezii 1910-kh-nachala 1920-kh godov* (Berkeley: Berkeley Slavic Specialties, 1979), pp.13-14. 父ピョートルはウラジーミル・ナボコフの父と同様にペテルブルクの第3ギムナジウムで学んだ。E. B. Belodubrovskii, “‘Otklikaius’ fragmentami iz sobstvennoi biografii...’ Epizod perepiski G. P. Struve i V. V. Veidle,” *Novyi Mir* 9 (2002), p. 135.

(6) Gleb Struve Papers, Box 147, File 16.

(7) 1923年6月23日のユリヤ・ストルーヴェへの手紙でツヴェターエヴァがレフ・ストルーヴェの健康状態を心配している。Marina Tsvetaeva, *Sobranie sochinenii v semi tomakh*, tom 6 (Moskva: Ellis Lak, 1995), pp. 642-643.

ンスタンチンおよび母と共に亡命する。パリで生まれフランス国籍だったため、1930年代に兵役義務によりフランス軍に従軍したことを除いて、ほとんどの時間を父ピョートルの秘書として過ごした。1941年までフランス総領事の運転手として勤務するが1941年にドイツ人によりフランス国籍のためベオグラードより追放される。戦後はセルギー・プラシユスキー大主教を頼り、副輔祭となる。修道士になることを考えるが父の補佐のためにあきらめ、1951年にパリで亡くなった<sup>(8)</sup>。

グレープの経歴は同時代人との比較においてきわめて特徴的である。学歴・軍歴から亡命にいたる経緯を以下に概観する。グレープは1911年よりヴィボルク商業学校にて学び、1916年の春に第四期卒業生の成績優秀者(金メダル相当)として卒業している。四人の弟アレクセイ、コンスタンチン、レフ、アルカージイもすべてヴィボルク商業学校に通っていた<sup>(9)</sup>。グレープの回想によれば、当時国民教育相の管轄する国立のギムナジウムと異なり、商業・産業省の管轄する商業学校は政治経済・法学・商品学などが必須科目である一方、ラテン語などの古典語科目は大学進学者以外は選択科目であり、全体としてよりリベラルな風風を保っていた。当時の商業・産業省の大臣はセルゲイ・ティマシェフ、後にハーバード大学で教える社会学者ニコライ・ティマシェフの父であった<sup>(10)</sup>。また、同時代のサンクトペテルブルクの商業学校としては、ナボコフ、マンデリシュタームやジルムンスキーを輩出したテニシェフ商業学校も有名であったが、知識人の家庭では、子弟の一方をヴィボルクに、一方をテニシェフに送ることもしばしば行われ、人的な繋がりもあったとグレープは語っている<sup>(11)</sup>。ちなみにストルーヴェと、ナボコフは商業学校時代には面識がなく、1919年の夏に亡命後のイギリスにて知り合っている。

グレープ自身「ヴィボルク」時代を度々回想し、その進歩的雰囲気に影響を受けると共に、この時代を文学経験の始まりとしてとらえている。古典を愛しギムナジウムで学んだ父ピョートルは商業学校進学に反対したが、進歩的教育者の家庭で育った母は承諾した。グレープは後にヴィボルクとテニシェフとの違いを、サッカーを好む英国的雰囲気 of テニシェフに対しヴィボルクではバスケットボールを好んだこと(サッカーによる死傷事故を境にテニシェフ校より移動したヴィボルク校長ピョートル・アンドレーエヴィチ・ゲルマンの方針によりサッカーは禁止されていた)、またヴィボルクが当時ロシアでも珍しい共

(8) グレープ・ストルーヴェの兄弟については以下を参照。“Voprosnik,” Gleb Struve Papers, Box 1. File 5; ストルーヴェ家に関しては以下を参照。Dimitri Shakhovskoy, “Les Struve: monographie généalogique, suivie d’un index des noms propres,” in Anita Davidenkoff, ed., *La Russie en devenir: Mélanges en l’honneur de Nikita Struve* (Paris: Institute d’études slaves, 2002), pp. 191-229.

(9) “Application for Guggenheim Fellowship in 1951,” Gleb Struve Papers, Box 2, File 5.

(10) E. B. Belodubrovskii, “‘Otklikaius’ fragmentami iz sobstvennoi biografii...” (前注5参照), p. 135.

(11) Gleb Struve, “Vladimir Nabokov: Kakim ja ego znal i kakim vizhu teper’ (podgotovka teksta, kommentarii i perevod M. E. Malikovoi),” *Russkaia literatura* 1 (2007), p. 238.

学であったことなどを挙げている<sup>(12)</sup>。

ストルーヴェの文学的出発点はマレーヴィチを含む未来派の展覧会の印象を記した「路面電車B」である。ヴィボルク商業学校にて机が隣の友人セルゲイ・ニコリスキーと一緒に編集部にはいた学校新聞の特別号「明るい光」に掲載された。一方、後に関わるD. S. ミルスキーの文学的出発点はミハイル・クズミンとの交流であった。ミルスキーはヴィクトル・ジルムンスキー、レフ・プンピャンスキー、アレクセイ・スホーチンなどの友人と共に雑誌『環』を創刊してキーツやロセッティなどの翻訳を掲載した。またストルーヴェはニコリスキーの兄ユーリーの属していたヴェングロフのプーシキン・セミナーに出入りしていた詩人たちを中心とするグループ、ニコライ・オツープ、ウラジーミル・ズロービン、フセヴォロド・ロジュジェストヴェンスキー、ニコライ・アドゥーエフ、ゲオルギー・マースロフ、エレナ・ターゲルとの交流を自身の文学的出発点ととらえている<sup>(13)</sup>。

グレーブは同時代人かつ友人のナボコフに対し「私たちの人生は並行しながら展開した」と語る反面、裕福なナボコフ家とそうでないストルーヴェ家の差や、ナボコフに軍隊経験がないという違いを回想で伝えている<sup>(14)</sup>。グレーブは1917年にはサンクトペテルブルク工業大学経済学科、1918年にはモスクワ大学歴史文学科に入学する<sup>(15)</sup>。亡命後、ヘルシンキにて発行された外国旅行パスポートに書かれた肩書は「モスクワ大学学生」であった<sup>(16)</sup>。1916年のヴィボルク商業学校卒業後は1916年の秋と冬にカルパチア山脈の前線にて地方自治会および市の団体の供給拠点を管理、1916年から1917年にかけての冬にはミハイロフスコエ砲兵学校へ入学を試みるが身体検査により不合格、1917年初めに召集されるも健康上の理由で猶予される。後にクラスノエ・セローに駐屯していた騎砲兵迫撃砲大隊に志願兵として1917年7月19日に入隊するが、同年秋にクールスク県にて分宿させられ、そこで十月革命に遭遇する。その後家族の病気を口実にモスクワおよびペテルブルクへの休暇を得るが、その機会を利用して志願兵となるために南部へ渡る<sup>(17)</sup>。南部ではマルコフ将軍によりエカテリノダール(現クラスノダール)への物資用の部隊の一員として派遣されるが、後にカザフ人により拘留、ボリシェヴィキに引き渡され、チェルノモルスク共

(12) Gleb Struve, *K istorii russkoi poezii* (前注5参照), pp. 13-14.

(13) Gerald S. Smith, *D. S. Mirsky: A Russian-English Life, 1890-1939* (Oxford: Oxford University Press, 2000), p.36-45; Gleb Struve, *K istorii russkoi poezii* (前注5参照), pp.15-16; Gleb Struve, "Dela davno minuvshikh dnei," *Russkaia Mysl'* (May 4, 1978).

(14) Gleb Struve, "Vladimir Nabokov" (前注11参照), p. 238.

(15) "Voprosnik," Gleb Struve Papers, Box 1, File 5.

(16) "Zagranpassport," Gleb Struve Papers, Box 1, File 1.

(17) Vladimir Samarin, "Literaturnye zametki: 'Apostol antikommunizma' K 75-letiiu G. P. Struve," *Novoe Russkoe Slovo* (May 6, 1973); 入隊日に関しては以下を参照。"Zagranpassport," Gleb Struve Papers, Box 1, File 1.

和国首都ノヴォロシスクへ部隊ごと移送、そこで人質となり、市監獄に投獄、3か月ほど服役した<sup>(18)</sup>。

グレープがどういう経緯で亡命をすることになったかについては、父ピョートルの足跡が多くを語っている。1918年3月にモスクワに帰還したピョートルは、住所を転々としながら、4月には『深き淵より』の執筆及び編集に着手、7月には新しい検閲制度により1910年以降彼が編集長を務め、十月革命に反対する姿勢を取っていた雑誌『ロシア思想』が弾圧されたため、本の編集に集中していた<sup>(19)</sup>。1918年8月には反革命派を取り締まる「赤いテロル」が公式に宣言され、ピョートル・ストルーヴェも居をモスクワに構えることが困難となったため、北に潜伏してアルハンゲリスクからのイギリス派遣軍の到着を待つことを計画していた<sup>(20)</sup>。ピョートルにはアルカージイ・ボルマンが付き添っていたが、彼はアリアドナ・ティルコヴァ＝ウィリアムスの最初の結婚の際の子供であった。ピョートルはニコライ・ワシーリエヴィチ・ヴァリツァイ名の偽造パスポートを携帯し、息子グレープも偽造パスポートを携帯しながら時として父に同行していた。南のクリミアを経てアテネに渡ったナボコフ(1918年4月)やミルスキー(1920年6月)とは対照的に、ストルーヴェはイギリス派遣軍を待つため北に渡った<sup>(21)</sup>。彼らは夏の間ヴォログダ南方約40マイルのアリアティノに滞在した。グレープを残し、ピョートルとボルマンは北方偵察を行うが、その間に民兵から尋問を受ける。無事帰還するが、その後1918年冬のイギリス軍到来の見通しがなくなると共に、ボルマンはピョートル及びグレープを連れてソ連からフィンランドへ出国することを決意した<sup>(22)</sup>。

以上のような経緯でグレープは父ピョートルと行動を共にし、父の後を追いながら亡命することになる。亡命経路に関しては、当時のペトログラードとフィンランドを結ぶ路線は二種類存在した。一方はフィンランド駅からヴィボルクへ向かう路線であり、他方はペ

(18) “Voprosnik,” Gleb Struve Papers. Box 1, File 5.

(19) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right, 1905-1944* (Harvard University Press: Cambridge, 1980), p. 258. 『深き淵より』は8月初旬には印刷が完了するものの、流通せずにボルシェビキにより倉庫に送られ2年半の間保管された。1921年のクロンシュタットの水兵蜂起を契機として、印刷所の労働者により小部数が流通した。1922年にニコライ・ベルジャーエフは『深き淵より』を持ってドイツに渡り、1930年にはオランダのスラヴ研究者が1部購入している。1967年にはパリで再出版されその後流通した。『ロシア思想』に関しては以下を参照。Catharine Theimer Nepomnyashchy, “Russkaya mysl’,” in Victor Terras, ed., *Handbook of Russian Literature* (Yale University Press: New Haven, 1985), p. 380.

(20) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right* (前注19参照), p. 259. 6月に同盟国がムールマンスク、8月上旬にアルハンゲリスクに部隊を上陸させた。そこからモスクワにレーニンを打倒するために進撃すると言う噂が蔓延していた。

(21) Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: The Russian Years* (New Jersey: Princeton University Press, 1990), p.163; D. P. Sviatopolk-Mirskii, *Poety i Rossii* (Sankt-Petersburg: Aleteiia, 2002), p. 266.

(22) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right* (前注19参照), pp. 259-264.

トログラードのオフトラ駅より出発してムールマンスク鉄道に乗り継ぎ、ラドガ湖の西岸を通りながら現カレリア共和国のサルタヴァラまでつながる路線である。後者は同盟国からの物資供給用であったが、警備隊の数が少なくしばしば国境を越えるために使用された<sup>(23)</sup>。国境を超える際にはモスクワでB. V. サヴィンコフ(V. ロープシン)とA. S. ベラルツソフの製造した偽造パスポートを利用した<sup>(24)</sup>。グレーブは父が1918年12月9日に使用したこの経路を「2日後」の12月11日に使用したと考えられる<sup>(25)</sup>。12月14日にはヘルシンキにて外国旅行パスポートが発行されている。1919年1月19日にはヘルシンキの英国大使館にて「父の秘書」として入国ビザを請求、1月27日にノルウェー南西部の港市ベルゲンよりイギリスのニューカッスルに到着している<sup>(26)</sup>。

1919年秋には父の友人であったオックスフォード大学教授・歴史家パーヴェル・ヴィノグラードフの援助により、学費の高いオックスフォード大学ヴァリオル・カレッジに入学、「英語上達のため」入学前から寄宿舎に入寮する<sup>(27)</sup>。オックスフォードの当時の入学試験は「ギリシア語」「ラテン語」「算数」の三科目から構成されていた。グレーブは第六学年から選択科目で学んだ「ラテン語」および夏の3カ月の詰め込みでクセノフォンを読みながら学んだ「ギリシア語」には合格したものの「算数」は落第した。しかし過去に兵役があったため再試験なしで合格したと語っている<sup>(28)</sup>。同じく十月革命後イギリスに亡命していたナボコフ兄弟から「ケンブリッジか、オックスフォードか」という相談を持ちかけられたグレーブは、昆虫学を学びたいウラジーミルには自然科学で定評のあるケンブリッジを、フランス文学に関心のある弟セルゲイにはオックスフォードを勧めた。セルゲイは一学期のみ学んだ後、ケンブリッジに移籍した<sup>(29)</sup>。ジェラルド・スミスによれば、ナボコフおよびグレーブは同時代人の中でミルスキーに比肩しうる多領域に広い英語能力を持っていた数少ない人物と考えられる<sup>(30)</sup>。しかし当時のグレーブは、戦時中の英国での二カ月の滞在、学校での二年の英語学習の経験を持ちながらも、「ナボコフと異なり、当時英語を自由に

(23) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right* (前注19参照), p. 266.

(24) Gleb Struve, “Struve, Gleb,” in Tat’iana Pavlovna Fesenko, ed., *Sodruzhestvo: iz sovremennoi poezii russkogo zarubezh’ia* (Washington: Victor Kamkin, Inc, 1966), pp. 544-545.

(25) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right* (前注19参照), p. 268; 「二日後」の記述に関しては、V. Samarin, “G. P. Struve” (前注4参照), pp. 309-313.

(26) “Zagranpassport.” Gleb Struve Papers, Box 1, File 1.

(27) Gleb Struve, “Vladimir Nabokov” (前注11参照), p. 239.

(28) E. B. Belodubrovskii, “‘Otklikaius’ fragmentami iz sobstvennoi biografii...” (前注5参照), p.136.

一方、ナボコフは同じテニシェフ校の同窓生サミュエル・ロソフの卒業証書を借り、ロシア語の文字の読めないケンブリッジの職員をだまして「事前の」試験なしで入学したと書いている。Brian Boyd, *Vladimir Nabokov* (前注21参照), p. 166.

(29) Gleb Struve, “Vladimir Nabokov” (前注11参照), p. 239.

(30) Gerald S. Smith, *D. S. Mirsky* (前注13参照), p. 34.

使いこなせなかった」と回想している<sup>(31)</sup>。

オックスフォード大学在学中のストルーヴェは現代史を専攻した。指導教官はポーランド出身で本名のNamirowskiからNamierに改名し英国籍を取得した歴史家ルイス・ネーミアであった<sup>(32)</sup>。大学在学中の1919年には『オックスフォード展望The Oxford Outlook』の編集長の依頼により「私が見たままのボリシェヴィズム」を発表、またオックスフォード大学イギリス・ロシア協会での発表「ロシア・ある問題」も1920年に同誌に掲載されている<sup>(33)</sup>。ロシア革命後のイギリスに蔓延する革命の希望的観測と、革命ロシアへの一面的な罵倒との双方に違和感を表明しながら、当時のグレープは「赤いテロル」を目撃した人間として、ロシア革命の悲惨とその歴史的重要性を述べている。オックスフォードの同級生には、1930年代にナボコフ作品のフランス語訳を出すことになる出版社アルテム・ファイヤール(Arthème Fayard)の経営者の息子ジャン・ファイヤールなどがいた<sup>(34)</sup>。1922年春には、ストルーヴェは3年間の学習年限をより1年少ない2年で卒業した。これは(常に後方部隊勤務であったが)同盟軍の兵役に参加したことが考慮されたものである<sup>(35)</sup>。その後財政的困難から学問の道をあきらめたストルーヴェは、ジャーナリズムおよび文芸批評に携わるようになる。

卒業後大陸に移住したグレープは、そこで多くの亡命ロシア作家と知り合うことになる。1922年より1924年まではベルリンに、1924年より1932年まではパリに住む。1922年にはユリヤ・アンドレと結婚。結婚直後ベルリンを旅行中にドイツ人俳優アレクサンドル・モイセンの出演するイプセンの演劇『ゆうれい』を堪能するが、これはたまたま同じベルリンで開かれていたパーヴェル・ミリュエコフの講演会でナボコフの父、ウラジーミル・ドミトリエヴィチ・ナボコフが暗殺された日だった。同日(1922年3月28日)夜にはストルーヴェはその追悼祈祷において、ナボコフを目撃している<sup>(36)</sup>。またグレープは、1922年夏にロシアよりベルリンに来た直後のマリーナ・ツヴェターエヴァおよびその娘アリアドナと知りあっている<sup>(37)</sup>。1923年2月5日にストルーヴェの長女マリーナ(ツ

(31) Gleb Struve, "Vladimir Nabokov" (前注11参照), p. 239.

(32) "Application for Guggenheim in 1956," Gleb Struve Papers, Box 2, File 5. Namierの経歴については以下を参照。Julia Namier, *Lewis Namier: A biography* (London: Oxford University Press, 1971), pp. xv-xvii.

(33) Gleb Struve, "Bolshevism as I saw it," *The Oxford Outlook* 1, no.2 (June 1919), pp. 95-101; Gleb Struve, "Russia: A Problem," *The Oxford Outlook* 2, no.7 (May 1920), pp. 185-191.

(34) Gleb Struve, "Vladimir Nabokov" (前注11参照), p. 249.

(35) *Ibid.*, pp. 239-240.

(36) *Ibid.*, 240; ミリュエコフの講演会は1922年3月28日の夜、最初の追悼式典は殺害から2日後の30日、2回目は31日にベルリン北西はずれのTegelのロシア正教会にて行われた。最後は4月1日に埋葬前の遺体が観衆に公開された。Brian Boyd, *Vladimir Nabokov* (前注21参照), pp. 190-193.



ヴェターエヴァにちなんだ命名)がベルリンにて生まれた際には、当時プラハに移っていたツヴェターエヴァは、出版されたばかりの『手仕事』に献詞をつけて贈っている<sup>(38)</sup>。その後ストルーヴェは『手仕事』および『プシケー』の書評をベルリンのロシア語新聞『舵Rul』に掲載し、その一週間後の1923年6月30日にはツヴェターエヴァから好意的な書評に感謝する手紙を受け取っている<sup>(39)</sup>。1926年には当時パリで雑誌『新しい家Novyi Dom』を編集していたニーナ・ベルベーロヴァとも知り合い、夫ヴラジスラフ・ホダセーヴィチと共に再三家に招かれている<sup>(40)</sup>。

1922年のオックスフォード大学卒業から1932年のロンドン大学スラヴ東欧研究所への就職の間のストルーヴェはジャーナリズムおよび文芸批評に携わりながら、父親の編集する『文芸復興Vozrozhdenie』『ロシア思想Russkaia Mysl』『ロシアRossiia』(後『ロシアとスラヴ世界Rossiia i Slavianstvo』)などの雑誌にたびたび寄稿している。1925年より1927年まで『文芸復興』、1927年より1928年まで『ロシア』の編集部員として、1928年より1932年までは『ロシアとスラヴ世界』の共同編集者となっている<sup>(41)</sup>。1931年には二名のフランス人により編集される匿名記事のフランス語月刊誌『月Le Mois』に連載を始めている。当時の匿名寄稿者の中にはコンスタンチン・モチューリスキーやウラジーミル・ウェイドレなどがおり、ストルーヴェもピリニャーク、シーリン(ナボコフ)、アルダーノフ、ブーニンなどのロシア語作家の他、レイス・ブラムフィールド、オルダス・ハクスリー、ジョン・ゴールズワージー、ヴァージニア・ウルフやロベルト・ムージルなどについて書評を掲載している<sup>(42)</sup>。『月』は1932年末まで全12号発行され、『月』編集部でグレーブを引き入れたのは父の友人であり『ロシア(ロシアとスラヴ世界)』誌でも同僚であったセルゲ

(37) Gleb Struve, "Iz moei perepiski c pisateliami: pis'ma G. B. Ivanova, M. I. Tsvetaeovi i M. A. Aldanova," *Mosty*, no.13/14 (1968), p. 397. ツヴェターエヴァは1922年5月15日にベルリンに到着、1922年8月1日にプラハに渡るまでベルリンで暮らしている。Anna Saakiant, *Marina Tsvetaeva: Zhizn' i tvorchestvo* (Moskva: Ellis-Lak, 1997), pp. 299, 315.

(38) Marina Tsvetaeva, *Sobranie sochinenii v semi tomakh* (Moskva: Ellis Lak, 1995), p. 643. 「別世界の私の名付け子—マリーナへ (Moei krestnitse v mirakh innykh – Marine)」とツヴェターエヴァは献詞で記している。ベルリン正教会の戸籍簿抜粋によれば1923年4月16日の洗礼の際に洗礼父は弟アルカーギー・ストルーヴェ、洗礼母はアレクサンドラ・プーシチナが務めている。"Vypiski iz metriceskoi zapisi," Gleb Struve Papers, Box 1, File 1.

(39) Gleb Struve, "Marina Tsvetaeva, 'Remeslo', 'Psikheia,'" *Rul'* (June 24, 1923). また1925年11月11日の手紙ではブリュッセルにて雑誌『忠誠Blagonamerennyi』を発行するドミトリー・シャホフスコイ公爵(後のヨアン・サンフランシスコ大主教)は、経済的に苦境にあったツヴェターエヴァをグレーブが助けるように伝えている。Gleb Struve Papers, Box 136, File 1.

(40) Gleb Struve, "Iz moevo arkhiva," *Mosty*, no.15 (1970), p. 396.

(41) Gleb Struve Papers, Box 2, File 5.

(42) Gleb Struve, "Vladimir Nabokov" (前注11参照), p. 246.

イ・オルデンブルクであった<sup>(43)</sup>。

この間のグレープは金銭的問題に苦しんでいたこともあり、文芸批評の他にも語学力を駆使しながら様々な仕事をしている<sup>(44)</sup>。1921年にはT. S. ルリエと共に訳でブルームズベリーの一員でもあった経済学者ジョン・メイナード・ケインズの本『平和の経済的帰結』を著者公認のロシア語訳としてストックホルムの出版社「北の火」より出版していた<sup>(45)</sup>。また、父ピョートルの友人でもある社会学者ピティリム・ソローキン(1889-1968)からは、彼の渡米直前の1923年に『革命の社会学』の英訳を頼まれている<sup>(46)</sup>。1924年にはピョートルの序文付きのトマス・ウッドロー・ウィルソン『民主主義の原則』をロシア語に翻訳し、それ以外にも1932年にはリュシアン・アーコルの『楽しい宮廷生活：18世紀フランス』をハミッシュ・マイルズと共に訳でフランス語より英語に翻訳している。ハミッシュ・マイルズとは翌年1933年にもヴァージニアおよびレナード・ウルフ夫妻の経営するホガース・プレスよりブーニンの『アルセーニエフの生涯(日々の源)』を翻訳出版している。

1922年秋以降はアルカージイ・ボルマンと共同で『ヨーロピアン＝ヘラルド The European Herald』の取締役役となり、同時にソフィアよりベルリンに移り父が再建した『ロシア思想』の編集にも携わり、1924年のパリ帰還直後は弁護士ノルデ男爵の秘書をしていた<sup>(47)</sup>。1924年春にはミハイル・フォードロフの「海外ロシア青年教育支援委員会 Komitet sodeistviia obrazovaniu russkogo iunoshestva za granitsei」および「ロシア国民委員会 Russkii Natsional'nyi Komitet」の書記となっている<sup>(48)</sup>。また1928年2月1日より1931年9月1日までパリの有限会社「フランス金融・工業・商社」にて英語およびドイツ語通訳として働いている<sup>(49)</sup>。

## 2. ロンドン大学スラヴ東欧研究所・ミルスキー後 1932-1946

1932年2月26日には父の友人であったバーナード・ペアズよりグレープにD. S. ミルスキーが去った後のロンドン大学スラヴ東欧研究所の空席に関する知らせが届き、1932年5

(43) Gleb Struve, “Dnevnik chitatelia: stranitsa iz istorii russkoi zarubezhnoi literatury: ob odnom maloizvestnom zhurnale,” *Russkaia Mysl'* (July 5, 1979), p. 11.

(44) Nikita Struve, “Russkii Berlin v Nachale 20-kh godov: Po pis'mam Gleba Struve k bratu Alekseiu,” in M. A. Vasil'eva and L. S. Fleishman, eds., *Russkii Berlin 1920-1945: Mezhdunarodnaia Nauchnaia Konferentsiia 16-18 dekabria 2002 g* (Moskva: Russkii Put', 2006), p.173. 1924年の手紙の中に特に金銭的苦境に関する記述がみられる。

(45) Dzhon Meinard Keins, *Ekonomicheskie posledstviia mira* (Stokholm, 1921).

(46) Gleb Struve Papers, Box 4, File 7.

(47) Nikita Struve, “Russkii Berlin v Nachale 20-kh godov” (前注44参照), p. 169; A. Bormanに関しては以下を参照。Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Right* (前注19参照), p. 260.

(48) V. Samarin, “G. P. Struve” (前注4参照), p. 310.

(49) Gleb Struve Papers, Box 1, File 1.

月25日にはロンドン大学の常任委員会より「ロシア文学」の助講師(Assistant Lecturer)としての採用が承認されたことが伝えられている<sup>(50)</sup>。

ロンドン大学に就職したストルーヴェは当初からD. S. ミルスキーという著名な前任者と較べられる運命にあった。D. S. ミルスキーとグレープは、1921年末あるいは1922年初頭のロンドンで、後のストルーヴェの夫人ユリヤの親戚の家で催されたグレープ本人の初めての詩の夕べで知り合っている。ミルスキーはグレープの詩を批判し、二人は後にパリで会うこともあったが話すことはなかったという<sup>(51)</sup>。ロマン・ヤコブソンの弟であり、ロンドン大学スラヴ東欧研究所の同僚でもあったセルジウス(セルゲイ)・ヤコブソンは「忠実な友人や崇拜者のグループのいたスビャトポルク＝ミルスキー」に替わって講師職を務めることは「困難な課題」であったが、それをストルーヴェは管理機構などとも折り合せて「うまく処理した」と語っている<sup>(52)</sup>。また共産主義に転向したミルスキーの政治姿勢に批判的であったホダセーヴィチは、グレープの就任にあたって「彼(ミルスキー)がもたらした害と同じくらいの利益をあなた(グレープ)がロンドンでもたらすなら、それはとても有意義だろう」と手紙の中で述べている<sup>(53)</sup>。D. S. ミルスキーの引き継ぎはロシア東欧研究所内に留まらなかった。それまでミルスキーが書いてきた英語での「現代ロシア文学史」を更新する仕事も、グレープに与えられたのである。1933年10月12日にはロンドンの老舗出版社ルートリッジ(Routledge)よりグレープの「ソヴィエト・ロシア文学史」出版案に関する好意的な返答が届き、ミルスキーの残した「1923年以降」から始める提案がなされた<sup>(54)</sup>。グレープの『ソヴィエト・ロシア文学史』は1935年に出版されている。

ロシア東欧研究所内でのグレープの役割は、ミルスキーと同様ロシア語・ロシア文学に関わるものであったが、当時の資料は戦時下のロシア東欧研究所での生活がそれ以前と同様に楽なものではなかったことを示している。研究所には1935年より1939年までチェコスロヴァキア政府の派遣によりルネ・ウェレックがチェコ語・文学の講師職についていたが、ヒトラーのチェコスロヴァキア侵攻による政府からの給料の差し止めが決定的となった。プラハに戻る術を失ったウェレックは、窮状を知ったアイオワ大学のトマス・マーク・パロット及び文学部長ノーマン・フォースターにより、一年契約の講師として新大陸に招聘された<sup>(55)</sup>。ウェレックの去った1939年には、ロンドンのグレープを訪ねてきたナボコ

(50) Gleb Struve Papers, Box 33, File 14, Bernard Pares; Gleb Struve Papers, Box 1, File 7.

(51) O. A. Kaznina, *Russkii v Anglii: Russkaia emigratsiia v kontekste russko-angliiskikh literaturnykh svyazei v pervoi polovine XX veka* (Moskva: Nasledie, 1997), p. 175.

(52) “Copy of Dr. S. Jakobson’s letter, Washington Jan 11, 78,” Gleb Struve Papers, Box 2, File 12.

(53) Gleb Struve, “Iz moevo arkhiva” (前注40参照), p. 398.

(54) Gleb Struve Papers, Box 59, File 16.

(55) René Wellek, “Prospect and Retrospect,” *The Yale Review* 69, no.2 (1979), p.309; Martin Bucco, *René Wellek* (Boston: Twayne Publishers, A Division of G. K. Hall & Co., 1981), p. 23.

フから大学への就職の可能性を問われたものの、見通しの暗さを語っている<sup>(56)</sup>。また同年3月にナボコフの窮状を救うための発表の場を設ける提案を受けたグレープは、4月に友人のアンジェリカおよびアラン・ハリス夫妻宅でその機会を設けた。そこでナボコフは『セバスタン・ナイトの真実の生涯』の一章の発表を行っている<sup>(57)</sup>。

グレープは1932年の研究所への就職以後、ロシア語亡命雑誌への執筆を減らす一方で、研究所の発行する『スラヴ東欧論評The Slavonic and East European Review』を中心とした英語での執筆を増やしている。ただし1939年から1945年までの戦時期においては、英語・ロシア語共に執筆数は大幅に減少した。また1935年8月14日のホダセーヴィチからストルーヴェへの手紙で『スラヴ東欧論評』編集部に原稿を渡したホダセーヴィチが憂慮しているように、研究所の『スラヴ東欧論評』の執筆に対して原稿料は支払われなかった<sup>(58)</sup>。

そのため講演会で糊口を凌いでいたミルスキーと同様、グレープも研究所よりの研究・教授職に専念する度重なる勧告にもかかわらず、ロンドンのロイター通信ラジオ局のロシア語無線受信士を兼職していた<sup>(59)</sup>。ロイター通信には1941年4月21日より働き始め、1年後の1942年3月1日より上級ロシア語無線受信士となっているが、研究所からの勧告により1943年10月1日からは週末のみの24時間勤務となり、1945年2月5日には退職している<sup>(60)</sup>。スラヴ東欧研究所においては1943年に講師(Lecturer)より準教授(Reader)に昇進している<sup>(61)</sup>。研究所の給料は講師時代(1932－1943)は年収325-400ポンド、準教授(1943－1947)時代は年収800ポンド(1943年当初は600ポンド)であったが、兼職の過酷な生活にもかかわらず、ロイター時代の週給5ポンドの給料は戦時下の貴重な収入源であったと考えられる<sup>(62)</sup>。

1944年には同じルートリッジから1935年に出版された『ソヴィエト・ロシア文学』の新版である『ソヴィエト・ロシア文学の25年：1918－1943』が出版されている。この新版を贈呈されたジョージ・オーウェルは、そこからザミャーチン『われら』を初めて知ることになり、44年2月17日の手紙で本の贈呈に感謝すると同時に「これまで聞いたことなかった」ザミャーチンについてグレープに問い合わせ、将来書かれる本のためにメモを取っている。オーウェルはその後も5年間に渡って1924年にニューヨークで出版された

(56) Brian Boyd, *Vladimir Nabokov* (前注21参照), p. 435.

(57) *Ibid.*, pp. 506-507.

(58) Gleb Struve, “Iz moevo arkhiva” (前注40参照), p. 401.

(59) Gleb Struve Papers, Box 2, File 13; ロイターの退職勧告に関してはWilliam D. Roceの1943年9月9日の手紙を参照。Gleb Struve Papers, Box 1, File 7.

(60) Gleb Struve Papers, Box 119, File 11.

(61) Gleb Struve Papers, Box 2, File 13.

(62) スラヴ東欧研究所時代の給与に関しては以下を参照。Gleb Struve Papers, Box 2, File 5; Gleb Struve Papers, Box 1, File 7; ロイター時代の給与に関しては以下を参照。Gleb Struve Papers, Box 119, File 11.

ザミャーチンの翻訳の入手について、未亡人の連絡先について、新訳の出版について連絡を取っている<sup>(63)</sup>。なお1950年にはストルーヴェは後に二番目の妻となるマリー・クリーガーと共訳でオーウェルの『動物農場』のロシア語版を出版し、後書きではオーウェルに対するグレーブの文学史の影響を分析している<sup>(64)</sup>。

1943年5月26日には母ニーナ、1944年2月26日には父ピョートルが戦時下のパリで亡くなっている。第二次大戦後の1946年5月20日にはカリフォルニア大学バークリー校の副総長モンロー・ドイチュより同年9月19日より一年間の「ロシア語・ロシア文学」の客員教授(Visiting Professor)としての招聘を受けている。6月8日には、招聘に関連してスラヴ科のオレク・マスレンニコフより授業内容が提案されており、秋学期に「ソヴィエト・ロシア文学」、ミリューコフの『ロシア文化概説』のような「ロシアの文化的伝統についての概論」および「ロシア語」、春学期には「現代ロシア論」「ロシア文学 1880 - 1917」および言語科目といった課題が挙げられている。報酬は4,000ドルであった<sup>(65)</sup>。1947年9月5日に渡米して以降1985年に亡くなるまで、その後の人生の大半をアメリカで過ごすことになる<sup>(66)</sup>。

### 3. カリフォルニア・バークリー 1947-1985

一年間の客員教授の期間を終えたグレーブは、1947年にカリフォルニア大学バークリー校のスラヴ語・スラヴ文学科の教授に就任する。すでに学期中の1947年2月17日に教授就任の依頼を受けている。年収は6,000ドルに上がっている<sup>(67)</sup>。

真珠湾攻撃の数日後、アメリカ学術評議会による非常時言語教育委員会の創設に伴い、日本語、中国語、ロシア語や東欧諸語を含む言語教育の情報収集が行われた。その後ロックフェラー財団の援助でコーネル大学にロシア語・地域研究プログラムが創設され、1946年には同じくロックフェラー財団の援助によりコロンビア大学にロシア研究所が創設、1948年にはハーバードにカーネギー財団の援助によりロシア研究センターが創設さ

(63) Gleb Struve Papers, Box 111, File 20; 44年2月17日の手紙に関しては以下を参照。“Letter to Gleb Struve,” in Sonia and Ian Angus Orwell, ed., *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, III. George Orwell* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1968), pp.95-96; オーウェルのザミャーチン『われら』(フランス語訳)書評。George Orwell, “Freedom and Happiness,” in Paul Anderson (compile and edit), *Orwell in Tribune: ‘As I Please’ and other writings 1943-7* (London: Politico’s, 2006), pp.272-275.

(64) Gleb Struve, “Primechaniia G. P. Struve,” in George Orwell, *Skotskii khutor* (Frankfurt/ Main: Possev, 1971), pp.119-120.

(65) Gleb Struve Papers, Box 1, File 7.

(66) Gleb Struve Papers, Box 1, File 7.

(67) Gleb Struve Papers, Box 1, File 7.

れた<sup>(68)</sup>。その後1965年までに「2ダース以上の大学がソヴィエト／東欧地域センターを持ち、3千人を超える研究者が主要な関心がスラヴあるいはソヴィエトだと自認し、スラヴ志向の専門的協会に所属し、ロシア問題に捧げられた多くの雑誌を講読し、ロシア語の学生は数万を数えた」という<sup>(69)</sup>。

そのようなロシアへの関心の高まりがグレープ・ストルーヴェのみならずロマン・ヤコブソンやウラジーミル・ナボコフといった「亡命ロシア」の巨人をヨーロッパからアメリカに導入し、彼らの研究環境を整備し、更にアメリカ国内で後進のスラヴ研究者を育成することに成功した背景として存在している。

新大陸でのグレープのロシア文学研究における貢献は、マンデリシュターム、グミリョフ、アフマートヴァなどの弾圧され、出版の道が閉ざされていた作家の作品を出版したこと、および最初で唯一の網羅的な「亡命ロシア文学史」(1939年までが中心)を出版したこととの2点が主に挙げられる。グレープと同様に新大陸に渡り、コロンビア大学に着任したロマン・ヤコブソンは、1948年3月24日の手紙で、出版予定の「読書界にグミリョフを生き返らせる」グミリョフ作品集に対する期待を述べている<sup>(70)</sup>。また1962年11月にモスクワの文学研究者ユリアン・オクスマンは、グレープに対する手紙の中で「ロシアでグミリョフ、マンデリシュターム、パステルナーク、ツヴェターエヴァの全集が現れるまで自分が生き延びているかどうかかなり疑わしい。だからこそ5日間正気に戻れないくらい興奮して貴兄のマンデリシュタームの本を読んでいる」と述べている<sup>(71)</sup>。事実グレープは1952年のグミリョフから1972年のツヴェターエヴァまでオクスマンの挙げた全ての作家の出版に関わることになる。グレープとフィリップフ編集による作品集は初めてというだけではなく、文献学的素養と最新の研究が反映された注釈によりその後の作家作品研究に大きな影響を与え、彼らの作品集から20世紀後半のロシア文学研究が出発し、作家がロシアに「帰還する」機会を1991年に先んじて与えたと言える<sup>(72)</sup>。

ユリアン・オクスマンの読んでいた本、グレープとボリス・フィリップフの共同で編集されたマンデリシュターム作品集は、1955年にニューヨークのチェーフ出版社(Izdatel'stvo imeni Chekhova)より出版された<sup>(73)</sup>。この作品集を読んだドイツ語詩人パウル・ツェ

(68) William B. Edgerton, "The History of Slavic Scholarship in the United States," *Beiträge zur Geschichte der Slawistik in Nichtslawischen Ländern* (Wien, 1985), p.495-496.

(69) David C. Engerman, "The Ironies of the Iron Curtain: The Cold War and the rise of Russian Studies in the United States," *Cahiers du Monde russe* 45, no.3-4 (2004), p.466.

(70) Gleb Struve Papers, Box 146, File 8.

(71) Lazar Fleishman, "Iz arkhiva Guverovskogo instituta: Pis'ma Iu. G. Oksmana k G. P. Struve," *Stanford Slavic Studies* 1 (1987), p.22.

(72) Dzhorzheron Sheron (Publikatsiia) " 'Vash Gleb Struve' Pis'ma G. P. Struve k V. F. Markovu," *Novoe literaturnoe obozrenie* 12 (1995), p.118.

ラーンからは1959年1月29日に面識のなかったグレープに対して手紙が送られている。ツェラーンからの手紙はドイツ語とフランス語で書かれ、グレープからの返事はフランス語で書かれた。グレープとの書簡は1960年8月7日まで続いたものの、両者は一度も会うことはなかった<sup>(74)</sup>。グレープの弟で古書業をパリで営んでいたアレクセイ・ストルーヴェはツェラーンとは1961年3月15日の時点で「2年ほど」の知り合いであり、そのアレクセイのもとでツェラーンはマンデリシュタム作品を購入したと語っている<sup>(75)</sup>。新版マンデリシュタム作品集では、ツェラーンのエコール・ノルマルの同僚でもあったエマニュエル・ライスから1963年に書かれた序文「オシップ・マンデリシュタムの作品」の中でツェラーンを回想し、彼の翻訳はマンデリシュタムがドイツ文学の中で「市民権を得る契機になった」と語っている<sup>(76)</sup>。

1952年のグミリョフ作品集、1955年のマンデリシュタム作品集を出版したチェーホフ出版社はグレープ自身設立前から関わっており、『亡命ロシア文学』はチェーホフ出版社第一期(1952-1956)の最後を飾る著作であった。チェーホフ出版社はフォード財団により設立され、「東欧ファンド East European Fund」の一部門として管理されていた。1952年に法人として設立されたチェーホフ出版社は「3年間」のフォード財団よりの資金提供期限が定められた形で出発している<sup>(77)</sup>。グレープ自身の関与は設立当初の1951年に遡り、ロマン・ヤコブソンに語っていたようにグミリョフを、あるいはオーウェルに影響を与えたザミャーチンの『われら』を、オリジナルのロシア語で出版することが、グレープ自身の当初の目的として存在していた。

1939年には出版直前であったがドイツ侵攻により頓座したザミャーチンのロシア語版出版に関して、グレープは旧知の作家アレクセイ・レーミゾフの紹介で1946年4月16日から1955年8月19日まで、パリの未亡人リュドミラ・ザミャーチナから手紙を受け取っている。グレープの紹介によるチェーホフ出版社による単行本出版の前には、ハーバード大学教授ミハイル・カルポヴィチの編集する『新雑誌 *Novyi Zhurnal*』に1ページあたり

(73) マンデリシュタム作品集の出版経緯に関しては以下を参照。Pavel Nerler, “Mandel’shtam i ‘borisoglebskii soiuz’: Mandel’shtam i Amerika. K istorii izdaniia Sobraniia sochinenii Mandel’shtama. Peregiska B. Filippova i G. Struve,” *Novyi Zhurnal* (2010), pp.99-176.

(74) 1960年の渡欧ではグレープ本人も語っているように「何故か」パウル・ツェラーンと出会う機会を持たなかった。事前にツェラーンの電話番号は受け取り、グレープは60年7月11日にパリに到着していた。Victor Terras and Karl S. Weimar, “Mandelstamm and Celan: A Postscript,” *Germano-Slavica* 2, no.5 (1978), p.361; Gleb Struve Papers, Box 2, File 13.

(75) Terras and Weimar, “Mandelstamm and Celan” (前注74参照), p.360.

(76) Emmanuil Rais, “Tvorchestvo Mandel’shtama,” in Osip Mandelstam, *Sobranie sochinenii* (Washington: Mezhdunarodnoe literaturnoe sodruzhestvo, 1964), p.LXXXVI.

(77) “Progress report #2,” Gleb Struve Papers, Box 26, File 9.

1ドルの原稿料で掲載する計画が進んでいた<sup>(78)</sup>。グレープによる交渉の結果、1951年11月6日の手紙で編集長ヴェーラ・アレクサンドロヴァは、上記の計画を了承している<sup>(79)</sup>。チェーホフ出版社の出版物は初期50冊の平均で発行部数3,000部あたり平均費用が6,000ドル、著者原稿料が規定の1,500ドルであった<sup>(80)</sup>。

グレープの『亡命ロシア文学：国境外文学の歴史的展望の試み』は同じく「亡命ロシア」を扱ったウラジーミル・ワルシャフスキー『見落とされた世代』と同じチェーホフ出版社から1956年に出版されている。グレープの書籍のドイツ語および英語での翻訳計画は存在したがいずれも頓挫した<sup>(81)</sup>。1956年1月8日の編集部のタチヤナ・テレンチエヴァ宛ての手紙では、グレープ自身二巻本で出すことを提案していたが、一冊最大416ページ、1ページあたり1,850文字という制限の一巻本に抑えられ、同様の理由でマンデリシュターム作品集も一巻本で出版されている。1956年5月25日には東欧ファンドのロシア語出版部門であるチェーホフ出版社の事業終了に伴い、書籍在庫の著者向けの販売が提案されている<sup>(82)</sup>。

その後チェーホフ出版社はロシア文学研究者マックス・ハイワードの主導で1970年に規模を縮小して復活し、ナジェージュダ・マンデリシュタームの回想録などを出版した<sup>(83)</sup>。またグレープとフィリップフによる作品集の刊行はチェーホフ出版社から場所を変え、増補された複数巻のマンデリシュターム作品集、アフマートヴァ、ザボロツキー作品集はボリス・フィリップフ自身が取締役であったワシントンにある出版社Inter-Language Literary Associatesから出版されている。

1950年代に始まり1960年代に激化したソヴィエト側の名指しのグレープ批判を反映しながら、グレープ自身の執筆活動は本名によるもの以外にもゲオルギー・ストウコフ、X.Y.Z.、ANGOの変名を用いての文章も発表されている。ゲオルギー・ストウコフ名での執筆は古くすでに1924年の時点で使用されている<sup>(84)</sup>。その後もストウコフ名は1963年

(78) Gleb Struve Papers, Box 147, File 16.

(79) Gleb Struve Papers, Box 26, File 9. 編集長ヴェーラ・アレクサンドロヴァ（1895－1932）は米国務省のロシア語雑誌*America Illustrated*の元編集長であり、2年間に渡って人類学者マーガレット・ミードの著作*Soviet attitudes toward authority*の執筆に協力した。ミードの著作中にも研究チームの一員としてVera Schwarz (Alexandrova) の名前が挙がっている。Margaret Mead, *Soviet Attitudes toward Authority: an Interdisciplinary Approach to Problems of Soviet Character* (New York: McGraw Hill Book Company, Inc., 1951), p.12.

(80) “Progress report #6,” Gleb Struve Papers, Box 26, File 9.

(81) 英語版はDavid Pikeの翻訳草稿が存在しているが出版はされていない。Gleb Struve Papers, Box 61, 62.

(82) Gleb Struve Papers, Box 26, File 9.

(83) Gleb Struve Papers, Box 30, File 1.

(84) Gleb Struve Papers, Box 57, File 24. 1924年7月5日の*The New York Herald*への投稿記事の署名を参照。



のマンデリシュターム逮捕の契機となった「スターリンに関する詩」の発表、1965年のプロツキー作品集の序文執筆時などに使用された。またマンデリシュターム逮捕時の状況に関する情報はロマン・ヤコブソンよりロシアからの匿名情報として1953年8月29日の手紙で知らされていたが、マンデリシュタームの「最近国外より届いた」詩は前述したモスクワのユリアン・オクスマンにより1962年11月の手紙に添えてもたらされた<sup>(85)</sup>。オクスマンの手紙は1962年にモスクワに滞在したバークリーの同僚である歴史家マーティン・メイリアや1963年春に滞在したスラヴ語・文学科の同僚ケトリン・B. フォイエルにより移送された<sup>(86)</sup>。1964年にオクスマンはグレープにより『ロシア思想』（1963年2月2日、1963年5月7日）に発表されたX.Y.Z.の署名記事を原因として作家同盟を除名処分になり「文学辞典」および「文学遺産」編集部および世界文学研究所からも解雇された<sup>(87)</sup>。1965年9月に西側での作品発表による反ソ扇動により逮捕されたアブラム・テルツことアンドレイ・シニャフスキーは世界文学研究所の同僚であり、オクスマン＝テルツ説も存在していた<sup>(88)</sup>。

1967年6月8日の「ロシア思想」にはグレープのバークリー退職に関する記事が掲載されている。スラヴ東欧研究所から数えて45年に渡る教授生活から離れ、一学期を研究に専念した後にトロント大学にて客員教授として迎えられるという内容であった<sup>(89)</sup>。退職後のグレープにとってロシア亡命文学研究は1956年の著作(初版)刊行で完結したというよりも、その後更に継続される生涯のテーマとして続けられた。死の直前の1984年にはパリのYMCA出版社より第二版が刊行され、死後の1996年には『亡命ロシア文学』の第三版がラッポ＝ダニレフスキーによりモスクワで刊行された。

グレープの『亡命ロシア文学』に対する反応は多様であった。ロマン・グーリは「在庫目録」の不備について書評の4分の3を超える部分で「掲載されるべきであった人名」および「ロシア語の不備」について具体的に列挙しながら糾弾した<sup>(90)</sup>。ユーリー・イヴァスクは同時期に発表されたワルシャフスキーの著書あるいはゲオルギー・アダモヴィチ『孤独と自由』と比較しながら、ある伝説を別の伝説で補おうとする他の著者の主観性に貫かれた「亡命ロシア」に対するグレープの作品の客観性を賞賛し、また多様でありながら過去に埋

(85) Gleb Struve Papers, Box 146, File 8; L. Fleishman, "Iz arkhiva Guverovskogo instituta" (前注71参照), pp.25-26.

(86) Sheron (Publikatsiia), " 'Vash Gleb Struve' Pis'ma G. P. Struve k V. F. Markovu" (前注72参照), pp.149-150.

(87) L. Fleishman, "Iz arkhiva Guverovskogo instituta" (前注71参照); Sheron (Publikatsiia), " 'Vash Gleb Struve' Pis'ma G. P. Struve k V. F. Markovu" (前注72参照), p.137.

(88) L. Fleishman, "Iz arkhiva Guverovskogo instituta" (前注71参照), p.70.

(89) "G. P. Struve vykhodit v otstavku," *Russkaia Mysl'* (June 8, 1967), p.5.

(90) Roman Gul', "O knige Gleba Struve," Roman Gul', *Odvukon' Dva* (New York: Izdatel'stvo "Most," 1982), pp.51-58.

没していく点で一貫した全体性を保っている「亡命ロシア文学」に対し「在庫目録」を作ることの効用を称えていた<sup>(91)</sup>。

1956年の『亡命ロシア文学』から3年後、1959年に国際比較文学会で発表された「亡命ロシア作家：亡命文学の諸問題」は、より一般的な「亡命文学」の問題について触れながら、「亡命ロシア文学」の輪郭を描き出している<sup>(92)</sup>。地理的な祖国との隔絶による絶望を逆説的に捉えた「亡命の効用」においてティボーデの書いたフランス革命時の亡命文学者と比較しながらも、フランス革命がロシア革命のように「ソヴィエト文学／亡命ロシア文学」という対立構造を作り出さなかったこと、大量帰国が存在したこと、シャトーブリアンのように帰国後に大量の作品が生み出されたこと、一流の亡命作家がほとんどいなかったことなどを挙げている。ポーランド亡命文学に対してはその強固な国民意識において、イタリア・ドイツとの比較においては亡命がほとんどの場合短期間に終わったこと、スペインとの比較においてはその文学作品が国外にも多くの読者を持ったことに対し、「亡命ロシア文学」は亡命ロシア人に向けてしか発信されなかったことを挙げている<sup>(93)</sup>。

グレープはそのソヴィエト・ロシア文学史を「ソヴィエト文学の起源はどこか、その時代的境界とは何か、ソ連の地理的限界に制限された革命後の文学はソヴィエト文学とみなすことができるか、ソヴィエト文学史はロシアのソヴィエト体制史と一致するか」という根本的な疑問から出発していたが、グレープは「亡命ロシア文学」の起源を1920年末に新体制に対し組織された最後の軍事的抵抗が失敗した時点としていた<sup>(94)</sup>。また「亡命ロシア文学」の境界とは「地理的かつ精神的」としている<sup>(95)</sup>。亡命文学論の結びにおいてグレープは将来に「亡命ロシア文学」が「ロシア文学」の遺産に組み込まれる際には、時代を生き延びることのできた最上の作品は、必ず党主導のソヴィエト文学よりも多くを残すであろうと予測している<sup>(96)</sup>。グレープは「亡命ロシア文学」の最終的な帰還、「ロシア文学史」への膨大な遺産の組み込みという課題の実際の現れ方を見ることなく1985年6月4日に亡くなっている。

(91) Yurii Ivask, "G. Struve. Russkaia literatura v izgnanii," *Opyty* (1956), pp.105-106.

(92) Gleb Struve, "Russian Writers in Exile: Problems of an Emigre Literature," W. P. Friedrich, ed., *Comparative Literature, Proceedings of the ICLA Congress* (Chapel Hill: University of North Carolina, 1959), pp.592-606.

(93) *Ibid.*, p.594-595.

(94) Gleb Struve, *Soviet Russian Literature* (London: Routledge, 1935), p.vii; Gleb Struve, "The Double Life of Russian Literature," *Books Abroad* 28, no.4 (1954), p.399.

(95) Gleb Struve, "The Double Life of Russian Literature," p.389.

(96) Gleb Struve, "Russian Writers in Exile: Problems of an Emigre Literature," p.606.

## おわりに

旧大陸でのグレープの活動が自身の文学史で書かれる作家や作品、新聞雑誌などと直接結びついた同時代的な体験であったのに対し、新大陸においてはそれらの活動を回想しつつ後の世代に向けて記録することを意識的に行った時期であると言える。フランス語雑誌『月』の回想では同じく執筆者であったウラジーミル・ウェイドレに回想の執筆を促しながら「私たちの記憶は短い、できる限り全てを残さなければならない」と語っている<sup>(97)</sup>。また『亡命ロシア文学』においても可能な限り客観的な作家や雑誌の「在庫目録」を作ることを目標にしていた。

また数多くの編集成果とその出版は、グレープのみならず自ら出版社を管理していたボリス・フィリッポフのような強力な推進力との共同成果であったとも考えられる。またチェコスロヴァキアで博士号を取得したロマン・ヤコブソンやアメリカで博士号を取得したユーリー・イヴァスクとは異なり、グレープは生涯において学位は文学士号(B. A.)のみであった。一方、ジャーナリズム時代およびスラヴ研究所の兼職時代に培われた言語能力はナボコフやミルスキーなどの同時代人と比較しても最も多岐にわたっている。1951年のグッゲンハイム奨学金申込書には使用可能言語はロシア語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ポーランド語、チェコ語、スウェーデン語、ノルウェー語を読むことのできる言語として挙げている。その豊かな言語能力によりもたらされる情報収集能力が長年『ロシア思想』および『新しいロシアの言葉』などの亡命ロシア語新聞に連載された「読者の日記」と題された文芸時評に反映されていた。大量に残された執筆原稿に対してグレープ本人の著作は文学史に関する著作を除くと、わずかに数点の研究書と1点の詩集だけであり驚くほど少ない。グレープは「放浪者 Strannik」の変名で詩を書いたヨアン・サンフランシスコ大主教に対し生前の著作集出版を促していたが、グレープ自身の著作集は死後も未だに刊行されていない<sup>(98)</sup>。英語・ロシア語を中心とした膨大な発表原稿をまとめた著作は存在していない。

グレープ・ストルーヴェの文学的遺産は、生前に本人によって刊行されたツヴェターエヴァ、ホダセーヴィチとの往復書簡のみならず、アーカイヴ資料の出版としてナボコフ、ブーニン、ウェイドレ、マルコフなどとの往復書簡として雑誌を中心に出版が進んでいる。グレープ自身も歴史的価値を持つ資料の保存、「後の研究」に対して特に意識的な研究者であった。

2010年に解禁されたナボコフ資料を始め、アメリカ議会図書館とイエール大学に所蔵されるプロツキーの書簡など、私的生活の伝記的読解から遠く離れ、むしろ嫌悪した作家

(97) Gleb Struve, "Dnevnik chitatelia: stranitsa iz istorii russkoi zarubezhnoi literatury: ob odnom maloizvestnom zhurnale," *Russkaia Mysl'* (July 5, 1979), p.11.

(98) Arkhipiskop Ioann Shakhovskoi, *Perepiska s Klenovskim* (Paris, 1981), p.185.

すらも伝記的解釈と文学史への組み込みが今後行われることを予測することは不可能ではない。「亡命ロシア文学」の文学的遺産に対し、今後刊行される亡命者たちの膨大な回想を利用しながら、生前おそらく刊行に尽力した作家の影に隠れていたグレープ・ストルーヴェの姿を、その作家たちを結びつける接点として浮かび上がらせるようなグレープ本人を対象とする伝記的研究、グレープの手の届かなかった「亡命ロシア文学」という過去をロシア文学史の中に組み込んでいく作業が、今後の研究者の課題となる。